

山と博物館

第36巻 第2号 1991年2月25日

大町山岳博物館



風 紋

「山の神」の一喝

— 山小屋気質健在なり —

萩 徹

元旦の一日を静寂の山小屋で過ごしました。夜は、山小屋の主人の炉辺の興味深いお話を拝聴し、その興奮さめやらぬまま、ベッドの中から、満天の星、月を愛で、また遠き友に思いを馳せ、至高の一時から深い眠りにつきました。

翌朝のことです。一階大広間に見知らぬ若い女の子が二人、薪ストーブにあたっておられます。

山の愛好者と思ひ朝の挨拶をしましたが、なぜか、彼女達からの挨拶はありません。間もなく、昨日の泊まり客もそれぞれに、大広間に集まってきましたが、いずれの方にも彼女達からの挨拶はありません。

ガラガラと玄関の戸が開いて、髪を黄色に染めた男性二人が無言で山小屋へ入ってきました。

先ほどの彼女達の友達でしょう。愉快そうにはしゃぎ始めました。

傍若無人のふるまいです。

「あなた方は、どなたですか」

山のおふくろが尋ねました。

「見ればわかるやろ、お客や」

男の言葉が終わるや否や、雷が落ちました。

「ここは山小屋です。あなた方は出ていってください」

「おぼえておれ」

捨てぜりふを残す若者達の背に、

「満州で、娘の、友の屍を、そして死体の山を越えてきた。その私達に脅しは無用、出ていけ」

とどめの、山の神の一喝でした。

溜飲を下げた小屋の泊まり客は、その時、

山小屋の老婦人の双眸にひかるものを見つけ

ました。

（鈴鹿市在住）

ウエストンの来日事情

三井嘉雄

明治二十一年から四十四年にかけて前後三回日本に来たウォルター・ウエストンは、南北アルプスや富士山や八ヶ岳などに登った。日本アルプスという呼び方が一般的になったのも、その著書に負うところが大きい。

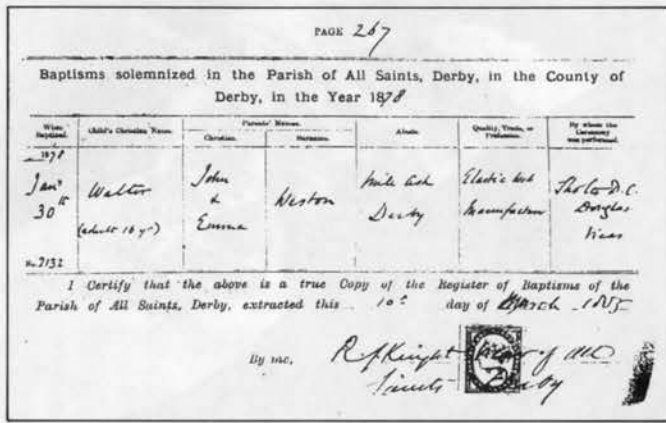
ところが、初めて日本に来た日が判明したのはここ数年のことで、この発見によりウエストン研究が急速な進展をした。それでもなお、なぜウエストンが英国外に行くことになったのか、なぜ日本を選んだのかについては今日でもあまり資料が見つからず謎のままである。

ウエストンが、ケンブリッジのクレア・カレッジを卒業したのは明治十六年(一八八三)で、すぐにリドレー・ホール神学校に入学した。すでにケンブリッジ大学の文学修士であった。そして、明治十八年(一八八五)にはオクスフォード教区の聖ジョン・ステイバン教会で、聖職者としての任命式を受けた。この年の年俸は一三〇ポンドで、パークシャーのレディングで司祭補となったのである。

聖職志願者の選考はきわめて厳しかったようで、ウエストンについていえば、出生地ダービーの人が身元保証書を出し、出身校の教授が学業を報告し、本人が洗礼証明書をつけて申告し、それを受けてオクスフォードの教区が教区主教に対して推薦している。それらの文書は現在では使われない古語を用い、いかにも伝統を重んじるイギリスを感じさせる。

教区からの推薦状には、本人と三年以上交誼のある教区牧師三人と、信徒代表の署名がある。しかも、教区牧師はそれらを公示して、その按手に異議があるなら申し出てほしいともしている。これらの書類によって、洗礼が明治十一年(一八七八)であることが判明した。

ウエストンが長崎に到着したのは、明治二十一年三月二十九日であった。吹田市の川村



ウエストンの洗礼証明書

宏氏が、長崎で発行していた英字新聞で発見された。同じ船で日本に出発したはずのバンコムの名が見えないので、バンコムは先着していたと思われる。ウエストンがエルサレムに回り道していたためであろう。

長崎で一泊し、翌日、神戸に向けて出港する。このときは、ウエストンが二十七年に朝鮮半島へ行くとき、またその家に立ち寄って、当時はそれがモンドレルの住いであり、自分が日本に来て最初に入った家だと日記に記している。東山手十一番の牧師館らしい。

W・P・バンコムの大坂の居宅には、十月までウエストンが住み込んだし、バンコムは次の年には徳島のインマヌエル教会に転任した。のちにウエストンは、バンコムとともに日本聖書協会の委員を務めることにもなる。

長崎を拠点に、九州全域の伝道をはじめていたV・H・モンドレルは、明治二十年にイギリス教会宣教会(CMS)に何回か手紙を出し、九州への宣教師の増員を要請していた。その理由の中には、英語教育をしながら伝道すること、熊本ブランドラムによる伝道成績がよいことなども挙げている。モンドレルは、十年には出島に教会を建てた人で、その塔に鐘を寄進したのはグラバーだった。

一方、要請を受けたCMSでは日本派遣の人選をしたらしく、十月ころウエストンから日本での働きについて受諾するという報告を受けていた。これから考えると、ウエストンは、自分から進んで日本行きを申し出たものではなく、CMSの推奨を受け入れたということになる。あわたたしい話で、たぶん日本

○クリストマス 今二十五日はクリストマスの當日あるを以て、午後第七時半より区内新町忘吾會會よ於て當地の聖公會と英學會の人々が發起て幻燈會を催す由なるが聞く處お據れば該幻燈は今度ウエストン氏か新お持ち來りし鮮明なる觀を呈す故に之によし因に記す當夜の幻燈は同祭に縁故なき人には一切縦覽を許さざる筈ありと云ふ

語も全然だめな身だった。しかし、モンドレルからの文書が来てウエストンに打診した、という記録はまだ出て来ない。

半年ほどを大坂で過ごしたウエストンは、熊本に赴任し、ブランドラム姉弟のところに同居して布教していた。姉は、その前年から第五高等学校の英語教師であり、ブランドラムも、のちに五高の講師となった。

ウエストンは火曜日と金曜日の午後、英語を教えていたらしい。この年の十二月二十五日の『熊本新聞』に、「クリストマス」と題した記事が出た。この中に、ウエストンの名が報じられた。日本の活字になった最初であろう。九州では、ブランドラムと祖母山にも登っている。

余談になるが、明治三十四年にロンドンに留学中の夏目漱石の日記に、「本日熊本校井氏ヨリ書面來ル」との記述がある。「桜井氏ノ書面ニBarrabee氏發狂ノ事アリ。香港ニ送ル途中ニテ死亡ストアリタリ。氣ノ毒ナルコトナリ」としている。桜井氏は第五高校の教師であり、夏目金之助は二十九年からこの英語教師だった。また、ブランドラムが香港に向かったのは、そのスミス主教夫人が叔

母であったためと思われる。ラフカディオ・ハーンが五高教師になったのは、明治二十四年であった。

ウエストンは、二十二年に箱根の宮ノ下で東京帝国大学教授B・H・チェンバレンに会い、北アルプス登山を勧められている。これは富士屋ホテルのことであり、のちにチェンバレンはここを住いとし、膨大な蔵書を置いて日本研究が進められた。ウエストンが北アルプスに足を踏み入れるのは、それから二年後だった。また富士屋ホテルのレジスター・ブックには、このあとウエストンの署名もたびたび出て来る。

神戸に居を移したウエストンは、二十七年に日本を去り、帰英した。この時点では、再度の来日の予定はもろろなかった。日本に思い残がないよう、この年は日本海の親不知から太平洋側までの縦断をして、北アルプスのいくつかの山岳に登山している。三年越しの念願である笠ヶ岳にも、立つことができた。ウエストンは、ロンドンのジョン・マリー社から『日本アルプスの登山と探検』を出版するまでは、牧師としてはともかく、日本在住の英国人たちからもあまり目立たない存在であったに違いない。

ところが、帰英後のウエストンにとつて日本への思い入れが大きかったらしく、イギリス国内を講演してまわった。そのほとんどは自発的なものであったと思われる。判っているだけでも明治二十八年六月、「日本人の登山と山岳の迷信」と題してアルバイン・クラブ、二十九年三月、英国人類学研究所、十月にアッピンガム校、三十年三月にはウインチエスター・キールテンハムで「日本と日本人」、十月にニュー・カッスルと続く。

その間にも、二十九年七月にはスイスのエギシュホルンに滞在して自著の序文を認めた。フリーシュの山腹にあるホテル・ユングフラウらしい。この年末に『日本アルプスの登山と探検』が上梓され、さらに翌年秋には、ニューヨークのスクリブナー社からも同じ本が出版されることになる。

さて、ウエストンがフランシス・フォックスの次女フランセス・エミリーと結婚したのは、明治三十五年四月三日だった。そしてアメリカ経由で二回目の日本に出发するのが、二十三日である。リバプールからマジエステイック号でニューヨークに向かっている。ニューヨークでスクリブナー社に立ち寄ったのは、推察に難くない。すでにフランセス夫人も日本行きを了解していたところを見ると、このときの日本赴任は早くから決定している、それはウエストンの希望によるものであろう。

夫人の父フォックスは、建築業者としてその名が知られていた。当時、イギリスで発展中の鉄道建設に携わり、ロンドンの地下鉄工事を請負い、いくつかの大聖堂の改修工事も手がけていた。また、祖父に当たるチャールス・フォックスはロンドン万国博覧会に際して、そのころ実用化されたガラス張りの巨大なドーム、クリスタル・パレスを建設してイギリスの威信を示した。その開会式には、ピクトリア女王も臨席している。その前の第一回万博の記念建築がエッフェル塔だったことを考えると、女王の熱の入れかたも想像できる。チャールスは、蒸気機関車の発明者ステイーブンソンの子息とも親交があった。ウエストン夫妻は、カナダ太平洋鉄道で大陸を横断し、バンクーバーからエンブレス・オブ・インディア号で横浜に向けて出港した。



リバプールからの乗船客名簿

この講演の日、ウエストンから誘われて岡野金次郎が聴講した。三日前に初めてウエストンに会ったばかりで、この数日後には小島島水を伴ってウエストンを訪ね、のちに山岳会結成にまで発展する有名な出会いとなった。この滞日での圧巻は、三十七年である。ウエストンが一年間に登った山は金峰山、鳳凰山、北岳、仙丈岳、浅間山、戸隠山、妙高山、八ヶ岳、富士山というものすごい高さだった。南アルプスの鳳凰山・地蔵仏は何ととっても人類初登頂であり、ウエストンを痛く喜ばせたい。

スエズ運河経由で帰国の途に付いたのは、三十八年三月である。その八月、スイスから志村鳥嶺に宛てた手紙には、「ですが頭の中は、日本の美しく野生的な谷や山頂へのあこがれで一杯です。」とある。これは本心であろう。さらに十月にジョン・マリーには、「現時点では、日本に戻れることはまずありません。」と残念がっている。翌年六月にはチェンバレンに、「でも私たちはどちらにも、日本に対してちよつとしたホームシックにかかり、いつの日に行くことができますよう望んでいます。」と書いた。夫妻そろって願っていたのであろう。日本から帰ったばかりなのに、もう日本恋しの念にかられていた。

五月二十五日である。のちにウエストンが記したところでは、夫人はカナディアン・ロッキーマウンテンに登ったことがあるとするが、日程から考えるとバンフあたりで一日くらいの登山であろう。

横浜到着が六月九日で、聖アンデレ教会の牧師として着任した。寿町三丁目一三〇番地にあった。そして、一ヶ月もしない七月四日には富士屋ホテルにおいて、夫妻で富士登山をする。その年、ウエストンは日本アジア協会の委員にも選ばれた。その中には、チェンバレンもいた。

明治三十六年二月、横浜公会堂でウエストンの講演会が催された。このときの謝礼は、東京の聖ヒルダ教会に孤児院を建設するために寄付された。アンデレ教会の石井わか、ヒルダ教会で教育を受けたことのある人だった。のちに孤児院・聖恵幼児院が完成する。

ウエストンは、帰英後も日本から英字新聞を取り寄せていた。週刊新聞とあるから、ジヤパン・ウィークリー・メールかと思われる。そして、アルバイン・クラブや王立地学協会はもとより、公立学校などでも日本についての講演をしている。またイギリスの高級紙『タイムズ』に、日本についての投稿が多くなるのも、この時期だった。四十年には口

Part I. Introductory

Geological features. Fauna - Flora & Characteristics of scenery. Comparison with European Ranges.

The Early Mountaineers - En no Shōtoku. Kōbō Denshichi. Pilgrim Clubs. 'Braving down the Mountain Gods'. The Japanese Alpine Clubs of to-day.

Some-based Journals - Annals of Fuji San. Comedy & tragedy on the 'Machūke Mountain'. Winter Climbing & Skiing. The 'Dragon Peak' of Etchu. Some mountain superstitions.

Training grounds in Central Japan - Mt. Fuji-san. The Japanese 'Solitudes'. Oama-Yama, a volcano with a past. The 'wore yet to come'. Yaku-ga-take - a feminine 'first on record'.

Part II. The Southern Japanese Alps

The Kōfu plain & the Valley of the Hōgokan. Primitive customs. The bear hunters of Oshūzan. The Exploration of Shinan. The 'White Mountain of Kōfu'. Ho-so-zan - the Aiguille du Gisant of Japan - A startling proposal 'an offer of professorship'. The crossing of Kōmaga-take. The Solitudes of Shinshū. Sweating in the far East. The sick pleasures of Kōfu.

ウェストンによる「極東の遊歩場」の目次案

ウェストンが最後の講演をしたあと、会長ウオルトンが謝辞を述べた。ウオルトンが決まったウェストンが帰国が決まったウェストンが日本アルプスの呼び声をもう一度聞くために、日本での友人をさらに増やすために、結成に大きく貢献した山岳会の発展を見るために、もう一度日本に戻ってくることを望むと結んでいる。H・B・ウオルトンは、アンデレ教会でのウェストンの後任者だった。ウェストンは四年の正月、横浜を出港する。これが日本の見取めとなった。途中のカイロで、一ヶ月ほどを過ごし

ンドン日本協会にも入会して、日本への熱は上がる一方であった。ここでのウェストンの講演も数多い。

本業の牧師のほうでは、はじめがウインブルドンのクライスト・チャーチで、のちにユール・エル・聖メリー教会を司祭した。ウインブルドンは夫人の出身地であり、その実家も、日本式にいう檀家であった。昭和二年には、夫人の父の葬儀もここで営まれた。ウェストンの住いと実家と教会は、それぞれ四百メートルほどの距離であった。

明治四十二年に山岳会がウェストンを名誉会員に推し、年末には、日本からの特製のバツジを受け取ったはずである。

三回目の来日は、四十四年だった。記録は見つからないが、これは当然、ウェストンのたつての希望によるものであろう。横浜クライスト・チャーチの牧師フィールドは、その四月に辞任を申し出ていた。そしてウェストンは、「日本に戻るために」ユーエルの教会

を去ったのだった。

このときは、ユーラシア大陸一万キロを鉄道で横断という旅をした。ドーバーの連絡船のターミナル、ベルギーのオーステンデからモスクワ経由でウラジオストクに出たもので、当時のシベリア鉄道は、イルクーツクの先からはハルビンを通る最短距離で日本海に出た。敦賀到着は十二月十八日で、イギリスから二週間ほどだった。

着任した横浜クライスト・チャーチは、イギリス人コンドルの設計による名建築で知られた。コンドルは、鹿鳴館などたくさん西洋建築を遺していた。ウェストンは古い友人と再会したし、妙義山の案内人・根本清三に巡り会って、北アルプスにまで連れて行けるほどの信頼を示したし、妙義山の筆頭岩に新ルートから登れたし、満足な日を送ったことと思う。

そして大正三年十月、横浜文芸音楽協会でウェストンが最後の講演をしたあと、会長ウオルトンが謝辞を述べた。



収容されたカモシカ H3.2.24

カモシカの生体捕獲はじまる

ヒノキなどの食害防止のため、長野県内では昭和五十四年から本格的なカモシカの捕獲がはじまりました。平成元年度現在、総捕獲数は五〇一頭へのぼり、そのほとんどが一般銃による射殺です。

大町市も昭和六十三年度から捕獲に踏み切りましたが、山岳博物館のカモシカに関する三十年以上の実績と、そこに根ざす市民の意識などを考慮して、ワナによる生体捕獲・当館への収容・飼育という方式をとっています。

本年度も大町市では五頭の生体捕獲を予定しています。元気な姿で収容され、人工的な環境にいち早く慣れて長生きしてほしいものです。二月二十四日、一頭目が収容されました。高齢のオスでした。(編集部)

ている。

次の年の八月、ジョン・マリーに出した手紙の中で日本について、「鮮かな思い出で、再訪した風景によってホームシックにかかりそうです。」と述べるのだった。

(登山史研究)

お願い

昭和初年に、長野県の熊谷村司氏がウェストンから手紙を受け取った記録があります。熊谷氏についてご存知でしたらお教え下さい。〒三九九 松本市笹賀六五九一、三井嘉雄

訂正

前号表紙の文章九行め「また、コタツが大好きだ」は「寒いのが好きだ。自然と」の誤りです。

訂正して、おわびします。

表紙写真撮影 古幡和敬

山と博物館第36巻第2号

発行所 長野県大町市 一九九一年二月二十五日発行
TEL 〇二一-
印刷所 大町市 山岳博物館
長野県大町市 大町市 山岳博物館
大町市 山岳博物館
定価 年額 一、三〇〇円(送料共)切手不可
郵便振替口座番号 長野四一三三一九三